

1. 事業細目	資源研究調査費	予算額	430 千円
2. 研究名	鮎資源利用開発研究	予算区分	県単
3. 研究期間	57年度～ 年度		
4. 担当者	橋本、里井、田沢、水谷、澤田		
5. 目的	エリ、沖曳網等で捕獲される仔稚鮎の品質、生残状況を把握検討し、蓄養、飼育技術の向上をはかる。		
6. 方法	<p>(1) 本年度の斃死率の高い漁獲鮎について、地域及び漁具により、歩留りに差があるのか検討した。湖南地方（エリ）、湖東地方（エリ）、湖西地方（ヤナ）で、漁獲された鮎を5～6月期に飼育した。飼育方法は0.3%塩水で密度が約3 kg/m²とし、野外池と室内水槽で行った。24時間蓄養後、2日で1回の割合で水が変わるように注水し、その後適宜水量を増やした。</p> <p>(2) 斃死魚はスレ症によるものが多かったので密度実験を行った。実験方法はヤナ漁獲鮎を3 kg/m²、5 kg/m²、10kg/m²、15kg/m²となるように設定し、流量を500cc/sec. に保った。使用網はテトロンメッシュF-280、目合0.05mmである。</p> <p>(3) 沖曳試験操業漁獲鮎を、密度約1.5kg/m²、塩分濃度が0%、0.3%、0.5%、0.75%となるように設定し、生残率を検討した。</p> <p>なお、輸送時の塩分濃度は0.55%で、24時間蓄養後、2日で1回の割合で水が変わるように注水し、その後適宜水量を増やした。</p>		
7. 結果の概要	<p>(1) 湖南（エリ）、湖東（エリ）、湖西（ヤナ）の順に漁獲時平均魚体重、重量歩留りを列記すると、1.08 g、2.64 g、3.83 g、73%、88%、97%となった。同様に室内の場合は、重量歩留り86%、72%、30%となった。室内の湖西（ヤナ）の歩留りが悪いのは、換水がうまくいかなかったためである。</p> <p>(2) 各イケースとも蓄養2日目までは、全くスレ症状がなく、斃死も見られなかったが、3日目からスレ始め斃死も見られた。また15kg/m²でチョウチンも出始めた。</p> <p>その後6日目まで白ボケがかなりで、斃死も加速度的にふえたが、その後淘汰された形で、症状も出ず、斃死も収まった。</p> <p>(3) どの試験区も3日目まで、加速度的に斃死してゆき、その後試験終了まで、顕著な斃死を見ることがなかった。</p> <p>最終的な重量歩留り〔(当初飼育kg合計-斃死kg合計)÷当初飼育kg合計×100〕は0%区31%、0.3%区63%、0.6%区78%、0.75%区58%となった。</p> <p>特に0.3%区は輸送時の塩分濃度0.55%からいきなり0.3%で飼育したため、最初3日間の斃死は多かったが、給餌を始めるころから活発になり、餌の食いも一番よく、取り揚げ重量換算で歩留りを計算すると87%になった。</p>		

8. 主要成果の具体的数値

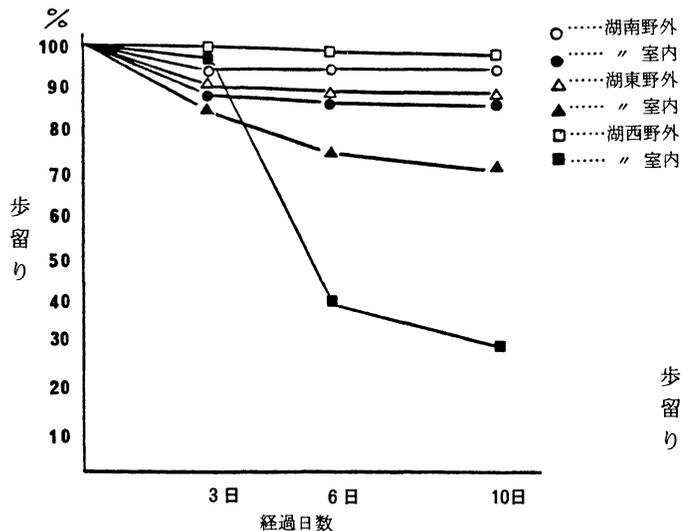


図1 地域別、漁具別漁獲鮎と歩留り

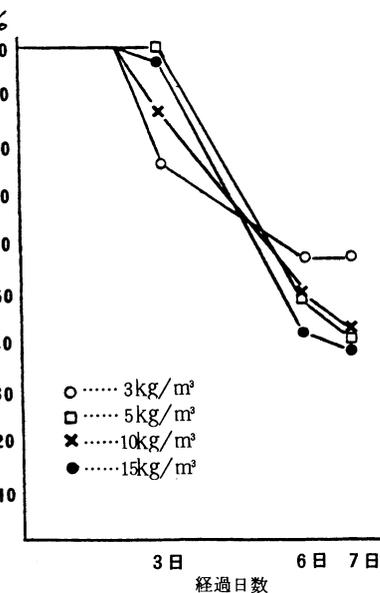
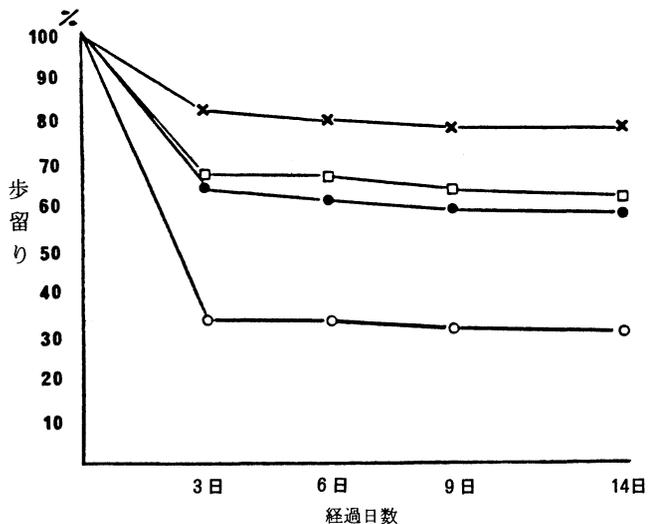


図2 飼育密度と歩留り

図3 沖曳網漁獲アユにおける塩分濃度と歩留り

9. 今後の問題点

弱体鮎の原因究明ならびに蓄養技術（Ca、Mg、P、ビタミン等の添加および配合割合の検討等）の向上

10. 次年度の具体的計画